戦争の犬たち

THE DOGS OF WAR

フレデリック・フォーサイス●篠原 慎／訳

角川書店

戦争の犬たち

昭和50年1月20日初版発行
昭和51年4月20日 9 版発行

訳者　篠原慎（しのはらまこと）　発行者　角川春樹

発行所　角川書店（かどかわしょてん）

東京都千代田区富士見２―13―３

郵便番号102 振替東京3-195208 電話東京(03)265-7111(大代表)

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

新興印刷・宮田製本

0397-791043-0946(0)

戦争の犬たち

THE DOGS OF WAR

by

Frederick Forsyth

©Danesbrook Productions Ltd. 1974

Japanese translation rights arranged with

Hutchinson and Company Ltd..

through Charles E. Tuttle Co., Inc.

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

〝鏖殺〟の雄叫びをあげ
戦いの犬を切って放とう

ウイリアム・シェークスピア

わたしの死を……にしらせて悲しませることのないように。
またわたしを神聖な墓地に葬ったり、寺男に弔鐘を打たせたり、
遺体を余人に拝ませたり、
葬儀に弔問客を招いたり、
墓前に花を供えたり、
はたまたわたしの名を人の記憶に留めたりすることのないように。

――トーマス・ハーディ

ジョルジオ、クリスチャン、シュレー、ビッグ・マルク、黒ん坊ジョニー、
そのほか無碑銘の墓に眠る者たちへ。
われわれはすくなくとも最善を尽したのだ。

目次

プロローグ　七
第一部　水晶山　二九
第二部　襲撃への百日　一八七
第三部　黎明の殺戮　四三三
エピローグ　四七五
あとがき　四七八

プロローグ

その夜、叢林地帯の中に拓かれた飛行場の上空には星もなく、月もまた見えなかった。西アフリカの暗黒が、暖かく湿ったびろうどのように、あちこちに散らばった人の群れを包んでいた。雲がイロコ樹の梢にとどきそうなほど低く、垂れこめていた。闇の中で息をひそめて待っている人々は、雲が一ときでも長くそこにとどまって、上空を飛翔する戦闘爆撃機の視界をふさいでくれるようにと、祈った。

進入（アプローチ）の最後の十五秒間だけ点燈された誘導燈をたよりに、かろうじて着陸したばかりのぼんこつDC4型機が、滑走路の末端で方向を変えて、ヤシの葉で屋根をふいた小屋のほうへ、エンジンを咳込ませながら、進んできた。

政府軍のミグ－4型夜間戦闘機が、上空を西へ、翔け抜けていく。おそらくそのパイロットは、夜間飛行がこわくて使いものにならないエジプト人に替わるため三か月前に送り込まれてきた六人の東ドイツのパイロットの一人なのだろう。ミグの姿は雲にさえぎられて地上からは見えないが、そのパイロットにも滑走路は見えないはずであった。おそらく着陸誘導燈のきらめきを懸命にさぐっているだろうが、ライトは消されたままだった。

タクシーイングするDC4のパイロットは、上空を飛ぶジェットの爆音が聞こえないので、前方を確認するためにライトをつけた。とたんに闇の中から、

「ライトを消すんだ！」

と、声が叫んだが、むろんパイロットに聞こえるはずがなかった。聞こえはしなかったが、パイロッ

トは自分の位置を確認するとすぐライトを消した。それにミグは数マイルも離れていた。南の方角で、砲撃音が轟いていた。そこではついに戦線が崩壊し、二か月の間ほとんど飲まず食わずで、弾薬もなく、絶望的な戦いを戦っていた兵士たちは、武器を棄てて、安全を保証してくれる密林に逃げ込もうとしていた。

ＤＣ４のパイロットは、すでにエプロンに駐機しているスーパー・コンステレーションから二十ヤードばかり離れたところに、機を停止させ、エンジンを切って、コンクリートの舗装に降り立った。一人のアフリカ人が駆け寄って、小声で話し合った。やがて二人は、ヤシ林の闇を背景にそこだけなお濃く黒々と見える、かなりの人数のグループの一つのほうへ歩いていった。二人が近寄ると、人々の群れは二つに分れた。そしてＤＣ４を操縦してきた白人は、彼らの中央に立っている人物の前で立ち止まった。白人はその男に会ったことはなかったが、噂は聞いていた。そして闇の中でも、わずかの煙草の火のおかげで、自分が会いにやってきた人物をすぐ、それと認めた。

パイロットは帽子をかぶっていなかったので、挙手の礼をするかわりに軽く頭を下げた。黒人に対してこのような所作をするのは初めてで、なぜこんな礼儀を行なったのか自分でも説明がつかなかった。

「ヴァン・クリーフ大尉です」

と、彼はアフリカ訛の英語で自己紹介をした。アフリカ人はうなずいた。粗い黒の顎髭が縞の迷彩服の胸をなでた。彼は落ち着いた声で言った。

「今夜の飛行には苦労しただろう、ヴァン・クリーフ大尉。しかし、補給にはちょっと遅すぎたね」

深みのあるゆったりした声で、アフリカ人というよりイギリスのパブリック・スクールの出身者のような――実際に彼はそうだったのだが――アクセントだった。ヴァン・クリーフは異和感をかんじ、海岸線からそこまで雲塊の間を飛びながら何百回となく自分にたずねた質問を、ふたたび心の中でつぶやいた。なぜおれはこんなところへやってきたんだ、と。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「補給物質を持って来たのではありません、閣下。持ってこようにも、もう何もないのです」
ここでまたもや一つ、新しい前例がつくられた。おれは絶対この男を、カフィル人ふぜいを〝閣下〟呼ばわりしないぞと心に誓っていたはずなのに、ついロがすべったのである。しかしやっぱり連中のいうとおりだ、と彼は思った。この男に会ったことのあるパイロットたちが、リーブルヴィルのホテルのバーで言っていた。あの男だけは違うんだ、特別なんだよ、と。
「じゃなんのために飛んで来たのかね？」
将軍はやわらかい声で言った。
「子供たちを引き揚げさせるためかな？　安全な土地へ避難させようとして、尼僧たちが大勢の子供をここまで連れて来ているのだが、今夜はもうカリタス機が飛来しないのだ」
ヴァン・クリーフは頭を振ったが、すぐにその所作がだれにも見えないと悟って、面映ゆい気がした。そして闇が自分の表情を隠してくれていることを有難く思った。彼の周囲を取りかこんで立っている護衛兵たちは、自動カービン銃をかまえて、彼を凝視していた。
「いいえ、わたしはあなたをお迎えに来たのです。おいでになるおつもりがあればのはなしですが」
長い沈黙があった。ヴァン・クリーフは、闇の中で将軍の視線を感じ取った。従兵の一人が煙草を口に持っていき、その光で将軍の白目がちらっと見えた。
「なるほど。きみは政府に派遣されて来たのかね？」
「いいえ、これはわたし個人の考えです」
ふたたび沈黙がこの場を支配した。彼の数フィート前で、顎髭をたくわえた顔が、わかったというためか、当惑を表わすためか、ゆっくりとうなずいていた。
「それはそれは、ありがとう。たいへんな飛行だったろうにね。せっかくだが、飛行機はすでに用意してあるのだ。あのコンステレーションだ。あれで外地へ避難したいと思っている」

ヴァン・クリーフはホッとした。リーブルヴィルへ将軍を連れて帰った場合、政治的にどのような反響が起こるか、彼にもまったく予測がつかなかったのである。

「ではご出発になるまで、待たせていただきます」

そう言って彼はふたたびうなずいた。そして握手のために手を差し出そうかと思ったが、はたしてそうすべきかどうか思い惑った。じつは将軍も同じ惑いを感じていた。ヴァン・クリーフは無言のまま将軍の前を離れて、飛行機のほうへもどっていった。彼の立ち去ったあとしばらく、黒人たちは沈黙をつづけた。やがて閣僚の一人が将軍にたずねた。

「南アフリカ共和国の人間が、白人が、なぜこんなことをするんでしょう」

一行のリーダーはフッと笑った。歯がきらりと光った。

「われわれには理解できないだろうね」

エプロンの奥のほう、ヤシの木立ちの陰で、五人の男たちがランドローバーの上から、樹林を出て飛行機のほうへ移動するおぼろな人影をじっとみつめていた。リーダーは、アフリカ人運転手のわきにすわっていた。五人とも煙草をふかしていた。

「あれは南アの飛行機にちがいない」

そう言ってリーダーは、後ろにすわっている白人たちの一人を振り向いた。

「ジャンニ、ちょっと機長のところへ行って、おれたちを便乗させてもらえるかどうか聞いてみてくれ」

背の高い、骨ばった体格の男が、ランドローバーの後部シートから降り立った。他の四人と同じように、彼もジャングル戦用の緑地に茶色の縞がはいった迷彩服に身を包んでいた。そして足には、これも緑色のキャンバスでできたブーツをはき、ズボンの裾をその中にたくし込んでいた。腰のベルトには水

筒と、肩にかけたＦＡＬカービン銃のマガジンを納めた弾薬入れが三つ、ついていた。それらのマガジンはいずれも空だった。ランドローバーの前へまわった彼に、ふたたびリーダーが声をかけた。

「銃を置いて行け」

リーダーはカービンを受け取るために、手を差し出した。

「ジャンニ、うまくやってくれ。あのポンコツでここを脱出できないと、おれたちは二、三日うちになぶり殺しにされちまうからな」

ジャンニと呼ばれた男はうなずいてベレーをかぶりなおし、ＤＣ４へ向かって歩きはじめた。ヴァン・クリーフ大尉は、背後から近づいてきたラバー・ソールの音に気づかなかった。

「こんばんわ（ナーンド）」

アフリカーンズ（南アフリカのオランダ方言。同国の公用語として使われている）の声を聞いて、ヴァン・クリーフはハッと後ろを振り向き、いつの間にかそこに来て立っていた男の姿形を見てとった。暗闇の中でも、左肩についている黒と白の頭蓋骨とその下で交差している大腿骨の図柄はよくわかった。彼はものうげにうなずいた。

「よう。あんた南ア人（アフリカーンズ）か？」

長身の白人はうなずいて、

「ジャン・デュプレというものだ」

と言って、手を差し伸べた。パイロットは、

「コーブル・ヴァン・クリーフだ」

と名乗って、その手を握った。

「どこへ行くんだい（ヴァール・ガーン・ジ・ヌー）？」

デュプレがきいた。

「リーブルヴィルまでだ。荷を積み終わったらじき出発する。あんたは？」

ジャンニはニッと笑った。
「仲間といっしょなんだが、動きがとれなくて弱ってるんだ。政府軍に見つかったらなぶり殺しにされる。乗せていってくれるとありがたいんだけどな」
「何人いるんだ」
「五人だよ」
空と陸とのちがいはあるが、同じ傭兵の一人として、ヴァン・クリーフはためらわなかった。無法者(アウトロー)の世界も持ちつ持たれつなのだ。
「いいだろう、乗ってくれ。しかし急いでくれよ。あのコニーが離陸したら、こっちもすぐ出発するから」
ジャンニはありがとうとうなずいて、ランドローバーに駆けもどった。他の四人の白人たちは、ボンネットを囲むようにして立っていた。南ア人は、
「オーケーだよ。すぐ乗ってくれと言ってる」
と、彼らに報告した。リーダーが言った。
「よし、武器を後ろに放り込んで、すぐ乗り込もう」
めいめいライフルと弾薬入れをランドローバーのバックシートに放り込んだ。リーダーは、運転席にすわっている少尉の階級章をつけた黒人将校のほうにかがみ込んで、言った。
「これでお別れだ、パトリック。すべては終わったよ。この車は棄ててくれ。武器はどこかに埋めて、そこに印をつけておけ。そして軍服を脱いで、ジャングルに逃げ込むんだ。わかったな?」
この少尉は一年前に一兵卒として傭兵部隊に入ったのだが、ナイフとフォークで食事をすることを覚えるより先に戦闘においてより能力を発揮して、たちまち将校に昇進した。彼はリーダーの指示を了解して、憮然とした顔でうなずいた。

「さようなら、隊長」

他の四人の傭兵たちはそれぞれ彼に別れのことばをかけて、ＤＣ４のほうへ向かった。リーダーが彼らのあとを追おうとして歩きはじめたとき、駐機場の背後にある叢林の闇の中から二人の尼僧があらわれて、小走りに彼のところへやってきた。

「少佐」

傭兵隊長は振り向いた。先に立っている尼僧の顔を、彼は記憶していた。数か月前に、彼女が運営している病院のある地域で激戦が行なわれ、彼はやむをえず病院をそっくり他へ撤退させたことがあったのだ。

「シスター・メリー・ジョセフ？　どうしてこんなところへ？」

初老のアイルランド人尼僧は、彼の汚れた戦闘服の袖をつかんで、熱したようにしゃべりはじめた。彼はうなずきながら聞いていたが、やっと老女がしゃべり終わったので、

「じゃ話だけはしてみましょう。それ以上のことは請け負えませんよ」

と言って、ＤＣ４の主翼の下に立っている南ア人パイロットのところへ歩いていった。二人の傭兵は、数分間、しきりに話し合っていたが、やがて戦闘服のほうが、待っている尼僧たちのところへもどってきた。

「いいけれど、急いでくれと言ってますよ、シスター。できるだけ早く離陸したいんだそうです」

「ありがとうございます」

白い僧服の女性は彼に礼を言ってから、あわただしく連れの者に指示をあたえた。連れは飛行機の後部へ走り寄って、客室のドアに通じる低い梯子（タラップ）を昇りはじめた。シスター・ジョセフは、駐機場の背後にあるヤシ林の陰に駆けもどった。まもなくそこから、男たちが一列になって姿をあらわした。各人、大きな包みを一つずつかかえていた。ＤＣ４のタラップのところに着いた彼らは、包みを順送りに、上

で待っている尼僧のところへ運び上げた。シスター・ジョセフは、それらの包みを一つずつ横に並べていった。それを背後で見ていた副操縦士がむっつりと黙ったまま手伝いはじめた。彼は下から差し上げられる包みを受け取って、それをシスターに渡した。

「あなたに神の祝福を」

と、アイルランド出身の尼僧はつぶやくように言った。包みの一つから、緑色をしたどろどろの便が流れ落ちて、副操縦士の袖を汚した。

「ひでえもんだ」

彼は小声で言って、働きつづけた。

ひとり残された傭兵グループのリーダーは、ちらっとスーパー・コンステレーション機のほうを見やった。後部のタラップを、避難民の群れ——主に敗北した部族のリーダーたちの身寄りだった——が昇っていた。ドアからもれ出る仄暗い明りの中に、彼は捜していた人影を見つけた。その人物は今しもタラップに足をかけようとしていた。その周囲には、この国に残ってジャングルに隠れ住むことになっている者たちが、タラップをはずすために待機していた。近づいてきた傭兵隊長を見て、彼らの一人がその人物に声をかけた。

「閣下、シャノン少佐です」

将軍はシャノンのほうを振り向いて、危急の場合にもかかわらず、微笑を浮べた。

「やあ、シャノン、いっしょに行きたいのかね？」

シャノンは将軍の前に立ち止まって、敬礼をした。将軍は目顔でそれに応えた。

「いいえ。われわれはリーブルヴィルへ脱出します。お別れの挨拶にうかがったのです」

「そうか。長い戦いだったね。それももう終わった。が、いずれにせよ、何年かの辛抱だよ。国民が

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.